コラージュ療法基本材料シート集の開発と今後の活用

The Basic Set of Materials for Collage Therapy；
Development and Utilization of the Set

今村友木子[1)]，加藤　大樹[1)]，二村　　彩[2)]，今枝　美幸[3)]

Yukiko IMAMURA, Daiki KATO, Aya FUTAMURA, Miyuki IMAEDA

Ⅰ　問題および目的

コラージュ療法は，雑誌などから気になった写真を切り抜いて画用紙の上に貼り，非言語的な自己表現をおこなう心理療法の一技法であり，森谷（1988）によって「持ち運べる箱庭」として理論化された。従って，コラージュ療法における「材料」とは，箱庭における玩具に相当するといえる。日本に最初に箱庭療法を紹介した河合（1969）は，玩具について“できるだけ多くの種類を用意する”としたが，同時に“一度に全部をそろえることは困難であるので，だんだんとそろえていけばよく，少数の玩具だけでも相応な表現を得られるものである”と述べている。また具体的な内容については，ぜひ用意すべきものとして“人，動物，木，花，乗り物，建築物，橋，柵，石，怪獣”をあげている。こういったアイテムを統制するということについては，山中は河合・樋口との対談（河合ら，2002）の中で「揃えたらつまらなくなる」，「展開がない」と指摘し，河合（1969）は“治療として用いる限り，できるだけ多彩な表現の可能性を引き出したいと思うので，特に指定せず，多くのものを用いる”と述べている。こういった「一定基準に揃えない」という態度は，箱庭療法の実践からコラージュ療法の実践へと引き継がれている基本的態度であろう。

このような背景から，コラージュ療法の材料の具体的内容は上述の箱庭の玩具に準ずると考えることができる。しかし実際にコラージュ療法の材料を用意することは，森谷（2012）が指摘するように，初心者には意外に難しい課題である。コラージュ療法の材料となり得るものは，箱庭の玩具よりもはるかに多い。コラージュの材料は雑誌やパンフレットなどに掲載されている写真であるため，その内容や種類が膨大であり，このことが箱庭よりも「材料の選択」を困難にしているといえよう。

また，箱庭療法の玩具は，繰り返し使用することが可能だが，コラージュ療法では，材料を画用紙に貼ってしまうため，同じものを繰り返し使用することができない。これは臨床場面でも基礎研究場面でも同じである。このように一度しか使うことができない切抜き材料によるコラージュ制作は，自由で偶発的な表現（森谷，2012）が生じる可能性が高

1)　金城学院大学・院
2)　金城学院大学
3)　金城学院大学大学院人間生活学研究科人間生活学専攻

く，それはコラージュ療法の魅力の一つといえよう。しかし，臨床場面における継続的な制作においては，最初に出現したイメージが繰り返し現れることや，初期に登場したアイテムが終結期に再登場し，クライエントの内的な変化を表現している場合がある。このような場合，箱庭療法では同じ人形や玩具が繰り返し用いられることが多いが，コラージュでは最初の切り抜きに「似たもの」に置き換えられて表現されることとなる。そのため，セラピストがこのイメージの代用に気づくことや，代用しやすいイメージを補填しておくことが必要となる。こういった「継続的なイメージの出現」に気づき，それに応じていくことも，初心者の材料収集において見落としがちな視点であろう。

従って，実際的な準備のあり方や使用状況において，「複数の同じ材料」や「初心者が用意する手がかりとなるような材料集」があれば，有用であると考えられる。

また，コラージュ療法の基礎的研究においては，コラージュ制作の実施手続きを統制するため，同一の材料を準備することが望まれる。しかし幅広い内容の素材を，大量に準備することによる費用や作業の負担は膨大であり，基礎的研究への取り組みにくさにつながっている。この負担を複写という安易な方法で軽減すると，雑誌等の出版物の著作権を侵害してしまう危険が発生する。基礎的研究のレビューとして，二村ら（2014）は特にコラージュ療法のアセスメント的側面の理論構築を目指す研究に着目し，国内で発表されている47件の研究について材料の観点から検討を行った。これによると，材料を統制している研究は20件あり，全体の4割であった。コラージュ作品上の表現や内容を比較検討するためには，材料の統制が不可欠であると考えられるにも関わらず，統制された研究が半数に満たない理由について，二村らは統制材料の準備にかかる負担を挙げている。また平元（2009）は，雑誌統制の有無に関する検討を報告しているが，「表現について検討するならば，材料の統制は必要」と結論付けている。

以上のような検討から，コラージュ療法に求められる基本的な要素を備えた材料集の必要性があると考えられたため，筆者らは試作版を経て「コラージュ療法基本材料シート集」を開発した。本論では開発プロセスを報告するとともに，その活用のあり方について考察を深めることを目的とする。

Ⅱ　「コラージュ療法基本材料シート集」の開発プロセス

心理臨床場面及び基礎研究場面のコラージュ制作に使用可能な材料集の開発は，「１．コラージュ材料に関する意識調査」「２．内容比率の検討」「３．試作版材料シート集の作成」「４．試作版の使用感と意見の検討」「５．試作版の修整」「６．コラージュ療法基本材料シート集の完成」の６つのプロセスを経て行われた。以下に，各プロセスについて説明を加える。なおプロセス１から４についてはすでに今村ら（2013, 2014）により発表されているため，数値等の詳細に関しては初出論文を参照されたい。

１．コラージュ材料に関する意識調査

2012年８月，日本コラージュ療法学会第４回大会の参加者を対象に，コラージュ療法の基本材料集についての意識に関する質問紙調査を実施し，臨床または研究の目的でコラージュ療法に関わりを持つ96名の回答を有効回答とした。質問紙では臨床経験，臨床領域，コラージュ療法経験，コラージュ療法における基本材料集についての意識（興味がある，表現が制限されるなど10項目６段階）に関し

て尋ねた。基本的材料集についての意識の項目からは，因子分析（主因子法，プロマックス回転）によって，「臨床的懸念」「積極的関心」「必要性」の３因子が抽出され，各因子の平均値を下位尺度得点とした。３つの下位尺度について，被験者内での比較を行ったところ，有意な差があり，臨床的懸念は他の２つよりも有意に低いことが示された。次に臨床経験（初心者群：修士修了後２年以内，/経験群：３年以上）によって，これら３下位尺度の比較を行ったところ，「積極的関心」については初心者群のほうが経験群よりも有意に高い関心を持っていることが示されたが，「臨床的懸念」と「必要性」については臨床経験による差は見られなかった。

以上の結果から，回答した心理臨床家は全般的に，基本材料集について「あれば使ってみたい，研究のためには必要」といった肯定的な意識を持っており，これは「表現が制限されるのでは」といった懸念よりも高いことがわかる。また，臨床経験が少ない層はより積極的な興味を持つことがわかった。

２．内容比率の検討

【作品における出現比率】

統合失調症者および一般成人のコラージュ療法作品における内容の出現比率を算出した。作品は，今村（2001）によって収集された作品を用いた。内容分類は①人間②乳幼児・子ども③動物④自然・風景⑤建物・室内⑥食べ物⑦乗り物⑧日用品・アクセサリー⑨芸術・宗教⑩スポーツ⑪キャプション⑫その他とした（表１）。

【臨床家が準備する材料の比率】

コラージュ療法の基本材料集に関する意識調査と同時に，「コラージュ療法の材料の比率」に関する調査を実施し，コラージュ療法の実施経験のある者45名の回答を有効回答とした。回答は「材料を用意する際に心がけている比率（理想的比率）」と，「実際に入手できている比率（入手比率）」について，帯グラフに記入を求めた。その際，内容の分類は上述の作品における内容の出現比率と同じ分類とした。

理想的比率と入手比率の比較では，①人間と⑥食べ物の入手比率が理想的比率より多く⑨芸術・宗教，⑩スポーツ，⑪キャプションの理想的比率が入手比率よりも上回った。また，臨床経験（初心者群：修士修了後２年以内，経験群：３年以上）による比較を行ったところ，③動物については，初心者群のほうが経験群よりも理想的比率が高い傾向にあり，⑨芸術・宗教については，経験群は初心者群よりも入手比率が有意に高かった。経験群の理想的比率を表１に記載した。

これらのことから，芸術・宗教に関する切抜きは作品によく出現するものの，収集は難しく，初心者よりも経験者は，意識的に集めていることがうかがわれた。従って，材料集を開発するにあたっては，このような入手しにくい材料についても積極的に取り入れることが必要であると考えられた。

３．試作版材料シート集の作成

上記の材料の比率を踏まえて，各種の写真を収集し，試作版材料集を構成した。写真は筆者らによって撮影されたものが中心であり，他に筆者らの知人等によって提供されたもの，既成の写真素材データとして販売されているものを含んでいる。人物の写真は，使用目的を説明し被写体の許可を得て撮影したか，または写真の提供を受けた。既成の素材については印刷物への使用が許諾されているものを利用した。

これらの写真を加工・編集して，６～９枚ずつ，Ａ４サイズに収まるように配置し，計

19枚の材料シートを作成した。これに無地のＡ４カラー用紙（水色・ピンク）を加え，計21枚を紙封筒に入れて，「コラージュ療法材料集（試作版）」とした。

４．試作版の使用感と意見の検討

上述のとおり作成された「コラージュ療法材料集（試作版）」を用いて，大学生や心理臨床家らにコラージュ作品を制作してもらい，その使用感を尋ねた。心理臨床家には研究会などの機会を用いて，質問紙だけでなく口頭での意見も収集した。

【使用感の比較】

実際のコラージュ制作における使用感について，自由な材料を使用した群（自由材料群）と試作版材料シート集を使用した群（シート集群）における違いを比較した。

2013年６月から11月までの間に大学の授業内（臨床心理学分野）で，コラージュ制作を実施し，制作後に質問紙を配布した。対象者は自由材料90名，シート集99名の女子大学生である。コラージュ制作の台紙には八つ切り画用紙を使用した。自由材料群は参加者が材料を持参したが，ファッション誌等に偏っているため，自然風景や動物などが含まれる材料を施行者が補填した。シート集群は，一人ずつ封筒に入った材料を配布した。

使用感の質問紙では，写真やイラストの大きさ，写真の品質，ほしい材料の探しやすさ，材料の種類の多さ，材料の全体の多さ，切り抜きやすさ，写真やイラストの内容という７項目について，「大変不満である」から「大変満足している」までの６件法で尋ねた。不満であると回答した項目については，その不満の具体的内容を自由記述で求めた。また，使いたいと思ったが材料になかった内容についても記述を求めた。自由材料集群は90名中86名，シート集群は99名中97名分を有効回答とした。各項目の平均値を２群間で比較したところ，「写真の品質」についてはシート集群のほうが満足感が高い傾向が示されたが，「写真やイラストの大きさ」「写真やイラストの内容」といった他の６項目には有意な違いが見られなかった。

従って，試作版材料集は一般的な雑誌などのコラージュ材料と遜色のない仕上がりであることが示された。「写真の品質」についてやや高い満足が得られたことについては，「コラージュ療法の材料」ということを意識した撮影，編集によるものであると考えられる。雑誌等では，使いたい対象に文字が重なってしまったり，多数の物が同時に含まれていたりすることで，切抜きとしては使いにくい写真が多い。一枚一枚を「コラージュのための使いやすい写真」として用意したことが，写真の品質の評価につながったと考えられる。

【臨床家等の意見】

国内各地のコラージュ療法研究会において，試作版材料シート集によるコラージュ制作をした後，使用感の質問紙を実施し，口頭での意見交換によって意見を収集した。参加者は合計99名（協力を得たのは３研究会）である。

口頭の意見交換では，次のような意見が得られた。「中高生に使用するとしたら，彼らの関心が高いアニメーションは必要ではないのか」「全体に古いか懐かしいような印象，最新のものが含まれていない」「雑誌よりも，無駄な部分がなく，凝縮されていて使いやすいと感じた」「個別には不足なものもあるが，何かに投影することが大切なので，投影できるような元型的なイメージがそろっていればよいのではないか」「怒りを表現する素材が見当たらない」「アセスメントとしての活用価値は高いだろう」「色紙はもっとあっても

よい」などである。

また自由記述では，写真の大きさについての記述が多く見られた。「大きい写真がほしい」「小さい写真がほしい」など幅広い意見があり，さまざまな大きさの写真を用意しておく必要があると考えられる。特に風景についてはより大きなものを求めている傾向がうかがわれた。内容としては，海の生物や天体などが複数あげられ，充足の必要性が感じられた。その一方で「アーティスト」や「キャラクター」は，肖像権および著作権の問題から材料集に含むことは困難であろう。同様に，中高生の関心が高い「アニメ」も困難である。彼らは「アニメ的な絵」の全般が好きなだけではなく，特定のキャラクターに思い入れを持っている可能性が考えられる。そういった個別性の高いものを，普遍的な活用をめざす材料集に含むことは難しい。しかし，彼らがそこに託している「感情」や「イメージ」の部分を，表出しうるような材料は揃えておくべきであろう。これらの意見収集を経て，喜怒哀楽や抽象的なイメージという視点から内容を再検討する必要性が感じられた。内面を十分に表出するためには，攻撃性や孤独感などのイメージを伴うような写真も必要であると考えられた。また，「不足しているイメージを色紙で補った」「黒や紫などの色紙がほしい」など，色紙についての記述も見られた。

５．試作版の修整

【全体的内容について】

自由記述や口頭での意見収集において，重複して見られた意見を中心に検討を行い，「古いもの・新しいもの」「自然な女性像」「リゾート的な海」「大きな写真」「イラスト」などの内容を加えることとした。これらの内容を加えても，全体の量が増えすぎないように，景色や建物などの中で，これまであまり使用されていない写真を削除した。「古いもの・新しいもの」としては黒電話とノートパソコンの写真を加え，新旧の通信手段を揃えた。他に，下記のような観点から修整を行った。

【遊びについて】

まず，コラージュ療法の大きな魅力である「遊ぶ楽しさ」を引き出すことのできる材料集とするため，遊び心の感じられるアイテムを加えることとした。そのひとつが「恐竜」の写真である（図１）。茂みに置かれた恐竜の玩具の写真には，落書きのような赤と黄色の線が書き加えられ，口から噴き出す炎が表現されている。恐竜が「怪獣」のようにユーモアを伴って表現されていると同時に，「落書き」を誘いかけるようなタッチでもある。そのほかにも「落書き風」の顔の絵（図２）や，動物の写真の間に散りばめられた小鳥のイラスト，クリスマスツリーや雪だるまなどによって，絵本のような楽しさや親しみが増したと考えられる。また当初は中学生以上を想定していたが，これらのイラストの追加によって，より年齢の低い幼児や小学生も使用対象として含むことが可能になったと考えられる。

また，季節感のあるイラストは，多くの人が共有できる一般的な「冬」や「夏」のイメージであり，精密すぎない単純な筆致で描かれ，普遍性の高いものとなるよう配慮した。

【ネガティブな感情表出について】

コラージュ制作を通して感情表出を促すためには，喜怒哀楽を表現できるアイテムが必要である。喜びなどの肯定的な感情の表出は，すでに試作版に含まれていた笑顔の人物や花の写真などで表現可能であると思われるが，怒りや攻撃性の表現については十分とはいえなかった。そこで，まず直接的には喜怒哀楽の４つの表情のイラストを追加した。また，漫画などで爆発や怒鳴り声の吹き出しなどに

用いられるようなイラストを追加した。先述の恐竜の写真は遊び的な表現だけでなく攻撃的な表現としても使用可能と考えられる。炎は，攻撃的な炎とも暖炉のような温もりとも受け取ることのできる写真を選んだ。

悲しみの表現は，直接的なアイテムとしては４つの表情イラストの「泣き顔」が追加されただけであるが，すでに試作版に含まれていた「うずくまる人」の塑像も悲しみや苦しみを表現できるアイテムである。他には人物のいない風景写真や静物的なアイテムが多く含まれており，これらの組み合わせによって，悲しみや抑うつ的な気分は表現可能であると考えられる。また，後述の「黒」の色紙の追加も否定的な気分の表出を助けるであろう。

【配置について】

「余白が少なくて切りにくい」という意見から，細かな余白があるよりも，余白がなく写真が連続していたほうが切りやすさにつながると判断した。また，すべてのシートの四辺の余白も細く切り落としにくいことから，用紙いっぱいに印刷する裁ち落とし印刷の手法を採用することとした。これらの修整によって，各写真はＡ４シートから切り出しやすくなった。さらに，シートごとの内容のまとまりが不十分であったため，配置を変更して，内容のまとまりを高めた。

【無地色紙の意義について】

本材料集には，試作版の段階で「ピンク」と「水色」のＡ４サイズの色紙が含まれ，修整の際に「黒」を加えた。これらの無地の色紙に関する注目は，臨床家からの意見収集において複数見られた。無地の色紙は特定の形を持たないため，「涙」「空」「リボン」など，制作者が自由に見立て，活用することができる。このように写真の内容と関係のない何らかの形を切り出しているものを今村（2001）は「創作」と分類した。また，これらの色紙は縁取りや背景色としても用いることができる。このように自由度の高い色紙は材料集における内容やイメージの不足を補う役割を果たしているといえよう。試作版のピンクと水色は，明るく柔らかみのある色調であったため，温かみのある感情やイメージの表出には使用しやすいが，暗い，怖いといった否定的な感情を投影することは難しい。そのため修整にあたり，暗く濃い色として，黒を加えることとした。これにより，「夜」や「暗がり」といった背景の表現や，否定的な感情表出のほか，はっきりとした「枠」としての利用も可能となりさらに表現の幅が広がったと考えられる。また，服部（1999）は対人恐怖症の事例の中で「覆う」表現や「重ね貼り」などの表現特徴を見出している。無地の色紙は，このような「覆う」「隠す」などの表現にも利用しやすいと考えられる。その際に，色のバリエーションもある程度必要であり，今なお十分ではないかもしれないが，黒の追加は不可欠であると考えられる。

６.「コラージュ療法基本材料シート集」の完成

上述のように修整された材料集を200部印刷し，臨床心理士の研修会におけるコラージュ制作と臨床場面において使用した。これらの制作と制作後の振り返りにおいて，自由材料と同様に内面を表現しうることが確認された。一方で，試作版における振り返りの際に「写真の色調の暗さ」が指摘されていたが修整されておらず，今回の臨床心理士よる制作の際にも，同様の指摘が見られた。そこで，特に修整が必要と思われた写真９点について色調補正を行い，「コラージュ療法基本材料シート集」の完成とした。

表１　「コラージュ療法基本材料シート集」の内容一覧

sheet	人間	子ども	動物	自然・風景	建物・室内	食べ物	乗り物	日用品・装飾品	芸術・宗教	スポーツ	キャプション	その他	内容のべ計	アイテム計	****イラスト
①	0	0	0	5	2	0	0	0	0	0	0	3	10	7	0
②	0	0	0	6	2	0	1	1	0	0	0	0	9	6	0
③	0	0	0	4	3	0	1	1	0	0	0	1	10	8	0
④	1	0	1	0	5	0	0	0	2	0	0	0	10	7	0
⑤	8	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	11	8	0
⑥	7	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	10	7	0
⑦	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8	8	0
⑧	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	1	13	12	1
⑨	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	1	13	12	3
⑩	0	1	0	1	0	7	0	7	0	0	0	0	11	9	0
⑪	0	0	0	0	1	8	0	8	0	0	0	1	12	11	1
⑫	5	1	0	0	0	0	1	1	0	6	0	0	15	9	1
⑬	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14	13	3
⑭	1	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	10	9	0
⑮	3	0	1	1	4	0	0	0	7	0	0	0	17	9	0
⑯	4	0	0	0	0	0	7	7	0	0	0	1	13	9	0
⑰	0	0	1	7	0	0	0	0	0	0	0	0	8	8	0
⑱	0	0	3	0	1	1	0	1	1	0	8	2	17	16	4
⑲	4	0	0	3	0	2	0	2	2	0	2	4	20	18	13
⑳	1	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	4	3	0
種別計	38	8	31	32	18	18	10	28	16	6	10	15	235	189	26
内容比率(%)	16.17	3.40	13.19	13.62	7.66	7.66	4.26	11.91	6.81	2.55	4.26	6.38	100.00		
作品出現率(%)*	20.11	4.23	16.40	16.93	9.52	9.52	5.29	14.81	8.47	3.17	5.29	7.94	124.34		
経験者理想(%)**	15.55	11.05	9.76	11.76	7.76	9.76	7.15	9.57	5.74	5.34	4.26	4.11			
試作版比率(%)***	17.10	4.15	10.88	13.99	10.88	8.29	4.66	12.95	6.74	3.11	3.63	3.63	100.00		

*作品出現率は，今村（2001）の調査時における一般成人214名と統合失調症者118名の作品における出現率である。
**経験者理想は，臨床家が準備する材料の比率に関する調査における回答に基づく。
***試作版比率は，今村ら（2014）による試作版材料シート集の内容比率を再検討し修正したものである。
****イラストのアイテムについては，内容のみを比率に反映し，「イラスト」というアイテム形態は比率外とした。

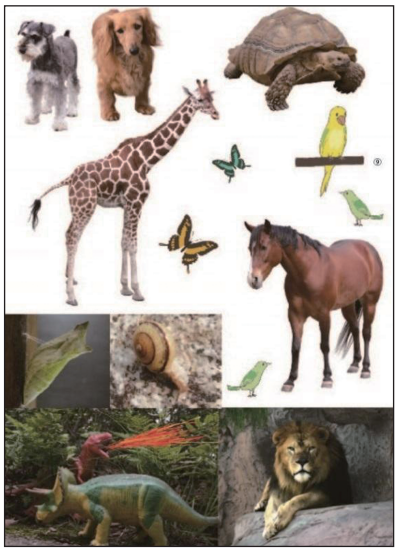

図１　シート⑨

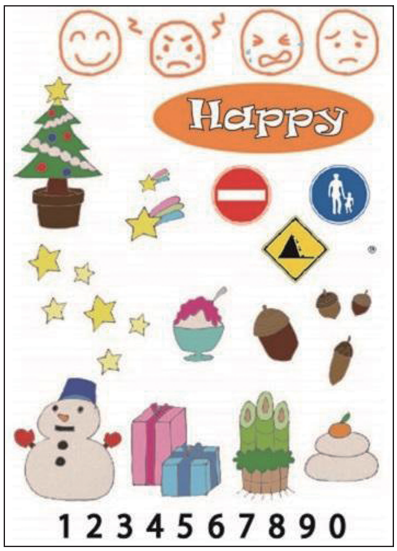

図２　シート⑲

Ⅲ　考察

１．コラージュ療法基本材料シート集の活用可能性

本材料集を使用することによる利点は，基礎研究，心理臨床のいずれにおいても少なくないと考えられる。

まず，基礎研究においては，研究者は何種類もの雑誌を大量に購入することなく，統一材料の準備をすることが可能となる。この利点は，特に短い研究期間で課題に取り組まなければならない大学院生には大きなものとなるだろう。試作版を活用した基礎研究も行われており（今枝・今村2013，2014；藤掛，2014），完成版の本材料集もすでに活用され始めている。またさまざまな研究において，同じ材料が使用されることにより，研究間のコラージュ表現の比較が可能となる。これまで統合失調症（今村，2001），アルコール依存症（伊藤・石井，2009），アルツハイマー（石崎，2000）といった疾患群の表現特徴や，乳幼児（西村ら，2011），小学生（滝口ら，1999），高校生（加藤，2003），大学生（山上，2012）といったさまざまな発達段階の表現特徴が検討されているが，材料が異なるため各群間の特徴を直接比較することができなかった。今後は，複数の研究者が共通の材料を使用することによって，より広がりのある比較をすることが可能になり，各疾患や各発達段階の表現特徴をより明確にすることが可能となると考えられる。これらの研究の発展は，コラージュ表現のアセスメント的理解へとつながるだろう。

次に，心理臨床場面においては，セラピーの導入期や非言語的面接の導入の際に，偏りの少ない本材料集を使用することにより，クライエントの意識的・無意識的な関心や興味の幅，気分などをうかがうことが可能であると考えられる。セラピストが本材料集の内容についてよく把握し，より多くの事例に導入するに従って，個々のクライエントの特徴をより捉えやすくなり，アセスメントとしての役割を果たすことができるだろう。また侵襲性が低く，遊びの要素を含んだコラージュを初期に導入することは，クライエントの緊張を和らげ，セラピスト・クライエント間の交流や，クライエントの自己洞察への橋渡しとなることも考えられる。さらに導入期だけでなく，ある程度セラピーが進展した段階や節目と思われる時期に，再度，本材料集を使用してコラージュ制作をすることにより，クライエントの内的変化を捉えやすくなると考えられる。

また，本材料集は当初，「バランスよく幅広い材料を含むこと」を主眼においてアイテムの収集がなされたが，それ以外にも雑誌材料にはない特徴を伴ったものとして作成することができた。まず，過剰な刺激と思われるものは排除されている。このため幅広い対象者に安心して材料を提供することができる。次に，広告などの不要な文字情報を含まない。雑誌では，使用したくなるような魅力的な写真の上に見出しや広告などの文字が印刷されていることが多く，たくさん写真が掲載されているような雑誌でも，きれいに対象を切り出すことのできる写真は限られている。本材料集では「使いたい」と思った写真をどれも使うことができ，写真選択のジレンマが排除されている。同様に，雑誌では紙の両面に写真が印刷されているため，「どちらも使いたいが，片方しか使えない」という場合も多くある。本材料集では片面のみの印刷によって，このジレンマも解消されている。こういった特徴は，「雑誌よりも，無駄な部分がなく，凝縮されていて使いやすいと感じた」という制作者の感想につながった。またＡ４サイズのシートという形状も，片手で持つことがで

き，扱いやすい材料となった。これらの性質は，制作者が素材を切り抜くというマガジン・ピクチャー・コラージュ法の特徴を持ちながらも，コラージュ・ボックス法のような“ほどほどの制限”や“制作者への配慮”という“守り”を持ち，両者の長所が共存しているといえよう。

２．実際的な活用上の留意点

これまで，統一的な材料集の開発と活用による利点を述べてきたが，今後の活用における懸念もある。第一に挙げられるのが，研究者や臨床家が文字通り「手っ取り早い」材料として本材料集を使用し，材料に対する吟味を行わなくなることである。心理臨床場面においても基礎研究場面においても，制作者（臨床場面の場合はクライエント，基礎研究の場合は研究対象者）に必要な材料がどんなものかを考えることは重要である。そして，本材料集であれ，違う材料であれ，それをじっくりと手に取り，この材料を制作者がどのように使用するのか，制作者がこの材料を通じてどのような表現をするのか，制作者の視点に立って材料に向き合うことが求められる。そのためには，やはり実施者（セラピスト，または研究者）自身が，さまざまな材料によるコラージュ制作と本材料集による制作の両方を体験していることが必要であると考えられる。制作体験を通して，材料の内容に対する理解だけではなく，材料集を受け取ったときの期待や不安といった感情，制作に要する時間や，材料の切りやすさ・切りにくさ，自己の内面を表出する際の達成感や葛藤など，非常に多くのことを得ることが出来る。特に臨床場面においては，クライエントにコラージュ療法を導入する時期や，どのような方法を提示するのかなど考慮すべき事柄は多い。コラージュ療法においてセラピストがしっかりとした制作体験を持つことが重要であるのは，箱庭療法における制作体験の重要性と同じである。

研究者の場合，プランによっては，同じ材料を使用して何度かの制作を求めることが考えられる。このようなプランでも，研究者自身が複数回，同じ材料で制作することによって，その間隔や回数について吟味することが望ましい。

臨床場面の場合，すでに述べたように，本材料集はアセスメント的活用など，コラージュ制作の最初や限られた回で用いられるべきものであり，他の回においては，そのクライエントにとって必要な材料をセラピストが用意するべきであろう。「クライエントにとって必要なもの」とは，バランスの取れた一般的な材料に加えて，本材料でクライエントが気に入って使った種類のもの，クライエントの臨床像に合いそうなもの，その時々に抱えている課題や，内面を表出できる手がかりとなりそうなものを指す。クライエントのことを十分に思い描いて材料を用意することは，より深いクライエント理解につながるはずである。臨床場面において，同じクライエントに本材料集を連続して使用することは，コラージュ療法の魅力である“材料と出会う新鮮な驚きや偶然性”を損なうことにつながると考えられ，注意が必要である。本材料の導入時期，対象とするクライエントについて，十分に吟味したうえで使用することが望まれる。

また本材料集の封筒には，コラージュ制作者宛のメッセージとして，「この封筒には，プリント①～⑳と，無地色紙３枚の合計23枚の材料が入っています。中身を出して，全部そろっているか，確認をしてから使用してください」と印刷されている。基礎研究場面では，複数の制作者に配布するため，このメッ

セージを教示の一部として研究者が読み上げるか，各自が読んでから中身を出すことを教示し，制作者自身が封筒から材料を出すことになる。しかし臨床場面においては，コラージュ・ボックス法の際に箱のふたを開けてクライエントに材料を見せるのと同様に，材料集の写真が見えた状態で渡したほうが，クライエントは安心して材料に接近することができると考えられる。この際，封筒のメッセージもセラピストが読んで，封筒から材料を出して手渡す，広げてみせるなど，クライエントに応じた配慮が求められる。

Ⅳ．まとめ

以上のとおり，「コラージュ療法基本材料シート集」の開発プロセスと活用のあり方についての考えを述べた。着手当初の動機は基礎的研究における必要性に重きがあったが，臨床家にとっての基本的な材料集の必要性にも看過できないものがあった。開発の過程で臨床場面を想定した配慮や修整が多々加えられた結果，当初の想定よりも，臨床場面で使用しやすいものとなったと考えられる。多くの道具がそうであるように，使えば使うほどに，長所・短所を含めて材料集への理解が深まり，その使用によって把握できることも増していくと考えられる。今後，本材料集がさまざまな基礎研究や事例研究で用いられ，コラージュ療法の発展とクライエント理解に寄与するものとなることを願う。

付記

本研究はJSPS科研費の助成を受けたものです（課題番号24530894）。本研究にあたり，撮影，コラージュ制作，材料集へのご意見など多くの方々のご協力を得ました。感謝申しあげます。また，内容比率の検討にあたりましては，早稲田大学大学院の藤掛友希さんに多大なご協力をいただきました。感謝致します。

文献

藤掛友希（2014）．コラージュ療法作品に対するPAC分析を用いた振り返り　日本心理臨床学会第33回秋季大会論文集　547.

服部令子（1999）．対人恐怖症者の表現特徴　現代のエスプリ（386）　至文　pp.143-152.

平元彩（2009）．雑誌統制の有無によるコラージュ効果の差及びアセスメント指標の検討　桜美林大学国際学研究科人間科学専攻修士論文要旨

二村彩・今村友木子・加藤大樹・今枝美幸（2014）．コラージュ療法の材料に関する検討（1）―基礎的研究の展望―　コラージュ療法学研究 5(1)．31-42.

弘中正美（2002）．玩具　岡田康伸（編）　箱庭療法シリーズⅠ　箱庭療法の現代的意義　至文堂 pp.74-86

今枝美幸・今村友木子（2013）．自己像に着目した継続的コラージュ制作における本来感の変化 日本コラージュ療法学会第５回大会抄録集 30-31.

今枝美幸・今村友木子（2014）．　継続的コラージュ制作における自己像への着目と本来感の関連　日本心理臨床学会第33回秋季大会論文集 540.

今村友木子（2001）．分裂病者のコラージュ表現―統一材料を用いた量的比較　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要　48，185-195.

今村友木子・加藤大樹・二村彩・今枝美幸（2013）．コラージュ療法における基本的材料の開発必要性　日本心理臨床学会第32回秋季大会論文集　448.

今村友木子・加藤大樹・二村彩・今枝美幸（2014）．コラージュ療法の材料に関する検討(2)－コラージュ療法材料シート集の試作と使用感－　コラージュ療法学研究　5(1)．
43-55.

石崎淳一（2000）．アルツハイマー病患者のコラージュ表現　―形式・内容分析の結果―　心理臨床学研究，18(2)，

伊藤満・石井雄吉（2009）．コラージュの変化を通してみたアルコール依存症者の病理性　心理学

研究，80(3)，215-222
加藤大樹（2003）．高校生のコラージュ作品に関する研究：学級適応・性格の観点からの検討　日本芸術療法学会誌，34(2)，23-32
河合隼雄（1969）．箱庭療法入門　誠信書房
河合隼雄・樋口和彦・山中康裕・岡田康伸（2002）．座談会　箱庭療法の導入から今までの諸問題，現代的意義　岡田康伸（編）箱庭療法シリーズⅠ 箱庭療法の現代的意義　至文堂 pp.9-32
森谷寛之（1988）．心理療法におけるコラージュ（切り貼り遊び）の利用　精神神経学雑誌90(5)，450.
森谷寛之（1993）．砂遊び・箱庭・コラージュ　森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕（編）コラージュ療法入門創元社　pp.147-155
森谷寛之（2012）．コラージュ療法実践の手引き　金剛出版
西村喜文・大徳朋子・立川小雪（2011）．乳幼児のコラージュ表現の特徴―印象評定を用いた集計調査―　箱庭療法学研究，24(1)．35－49
滝口正之・山根敏宏・岩岡真弘（1999）．コラージュ作品の発達的研究　現代のエスプリ（386）至文堂 pp.175-185
山上榮子（2012）．大学生のコラージュ表現－コラージュ解釈仮説から見た青年期の特徴－　人間文化H＆S，31，13-25